

文學博士上田萬年監修  
大矢透編纂

# 音圖及手習詞歌考

發兌 大日本圖書株式會社

# 音圖及手習詞歌考

## 小引

此ノ書ハ、編者曾テ國語調査委員會委員在任中、會命ニ遵ヒ編纂ニ着手セシ假名通考中ノ一篇ナリ。而シテ、在任中、曩ニ假名源流考周代古音考ヲ上梓シ、餘ハ半バニモ達セザルニ、同會廢止セラレ、止ムヲ得ズ、自ラ業ヲ續ケ此ノ書及ビ韻鏡考ノ二篇ノ稿成ルニ方リ、帝國學士院ヨリ、年來編者ガ從事セル假名ニ關スル研究ノ、極メテ孱劣ナルニモ拘ラズ、恩賜賞ヲ授與セラル、事アリ。是編者ノ感泣シテ歎ム能ハザル所ナリ。今ヤ此ノ書ヲ公ニスルニ臨ミ、之ヲ開陳シテ其ノ恩ヲ謝スルモノナリ。

大矢透謹記

# 音圖及手習詞歌考

## 凡例

一此の書は、假名通考、本編第五篇にして、我が國固有の音韻を示すところの音圖、並に之を記す文字、即ち假名を習ふべき詞歌につき、其の形質、其の製作の時代、及び作者を考定せるものなり。

一我が國に、最も古くより行はるゝ音圖は、五十音なり、假名手本の、中古以上に行はれたるは、阿女都千詞にして、中古以來、今日に至るまで、行はれたるは、伊呂波歌なり。又、伊呂波歌の以前に、大爲爾歌ありといへども、廣く用ゐられたるものに非るが如し。而して、其の五十音と、伊呂波歌とは、共に今日存在し、古くより、其の作者を考索せる先哲中、其の說、種々に別れ、今に至りて尙未だ一定せず。仍て、編者旁く諸說を聚めて、是に曾て、自ら研究せる歴代の假名遣、及び音數の沿革の說を考へ合せて、以て、縦ひ、之を確定せるまでには、至らずとも、聊か未定の區域を狭めんと希ひ、茲

に此の書を編せるなり。

一 此篇、五十音、伊呂波の考定には、最も確實なる例證を要するを以て、及ぶ限り、之が蒐集に力めたり、而して考證と論説とに對し、讀者をして、先づ古來の實例を通觀せしむべき必要あるが爲に、特に五十音の例證中、原本の寫眞、又は映寫して木版に附したるもの、多きに居るを以て、之を集めて別冊とし、本篇の附録とす。

一 此の篇の編述に着手するに方り、前國語調査委員會主査委員文學博士上田萬年氏の監修に係り、其の指授を蒙りしは言ふまでもなく、之を出版するに至るまで、編者の爲に種々の便宜を與へられし恩義に對しては、編者の深く、感佩して、忘るること能はざる所なり。

一 此の篇の編述を了れるまでには、故谷森善臣翁よりは、貴重なる材料を附與せられ、文學博士大槻文彦、田中勘兵衛、山田孝雄、橋本進吉、高野辰之、福井久藏等の諸氏より、材料を供給せらるるのみならず、種々懇篤なる注意を辱くせることは、編者の感謝に堪へざるところなり。

# 音圖及手習詞歌考

## 目次

### 序 說

..... 一頁

### 第一章 五十音圖

..... 一頁

第一節 五十音圖の蒐集

..... 二頁

第二節 五十音諸圖の異同

..... 四頁

第三節 五十音圖の種類及び構成

..... 八頁

第四節 五十音圖の製作時代及び其の作者

..... 一七頁

第五節 我が國の音圖としての五十音の價值

..... 二八頁

### 第二章 阿女都千詞

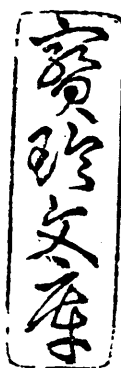
..... 三二頁

第一節 阿女都千詞の出典

..... 三二頁

第二節 阿女都千詞に對する先哲の所見

..... 三九頁



第三節	阿女都千詞の成立	四三頁
第四節	阿女都千詞の行はれし時代	四六頁
第三章	大爲爾歌	五四頁
第四章	伊呂波歌	五九頁
第一節	伊呂波歌研究の理由	五九頁
第二節	伊呂波歌及び之に關することの古書どもに見えたるもの	六〇頁
第三節	伊呂波歌の觀察	八〇頁
第一	製作の理由	八〇頁
第二	歌式	八〇頁
第三	字原	八二頁
第四	意義	八九頁
第五	語法	九二頁

第六	字數	九四頁
第七	德育上の教材に供すべき一點	九五頁
第四節	寶龜以後永觀までの歌調	九八頁
第五節	空海時代の草假名字體	一一九頁
第六節	天曆時代以上の音數	一二四頁
第七節	天祿以前伊呂波歌存在の跡無し	一二九頁
第八節	伊呂波歌の空海の作ならざる斷定	一四一頁
第九節	伊呂波歌製作時代及び其の作者の推測	一四四頁
結論		一五〇頁